

本科 1 期 4 月度

解答

Z会東大進学教室

高 2 東大 国語



出典：『発心集』 第四 / 立教大学 文A 80年・改題

現代語訳

比叡山に、叡実阿闍梨といって高德の僧がいた。天皇の御病気が重くていらっしやったところ、(平癒祈願のため、この叡実阿闍梨を) お呼びになったので、(叡実阿闍梨は) 何度も御辞退し申し上げたけれども、重ねての御命令を断りきれなくて、仕方なく参上した途中、みすぼらしい病人で、足も手も動かさずに、ある屋敷の土塀の外側にうつ伏せになって寝ている者がいた。阿闍梨はこの病人を見て、悲しみのあまり涙を流しながら車から降りて、気の毒に思っで見舞う。敷物を探して敷かせて(その上に病人を寝かせ)、(病人の) 上に仮ごしらえの小屋を作り、食物を探し求めて、看病をしているうちに、だいぶ時間が過ぎてしまった。勅使が、「日が暮れてしまいます。(参内せずこんなことをしているのは) たいへん都合の悪いことです」と言ったので、「(御所には) 参るつもりはありません。こうこうと、この事情を申し上げよ」と言う。お使いの者は驚いてその理由を尋ねる。阿闍梨が言うには、「世を捨てて仏道に帰依した時から、帝の御事であつてもとりたてて価値のあることとは思いません。(また) このような乞食であつてもまたおろそかにできません。まったく同じことのように思われるのです。それに加えて、帝の病気の御祈りのために祈禱の効き目がある僧を招集しようとするには、山々寺々に多くいる僧のうち、誰が参内しないことがありますか(、誰でも参内するでしょう)。(私が参内しなくても) 全く困ることはないはずですよ。(けれども) この病人においては、嫌がつて汚がる人ばかりで、近寄つて看病する人はいないに違いありません。もし私が(この病人を) 見捨てて行ってしまったならば、おそらく死んでしまうに違いありません」と言つて、その病人だけを哀れんで助けたために、とうとう参内しないままになってしまったので、当時の人々はめつたにない尊いことであるとうわさしたのであつた。

問1 帝の病氣平癒の祈禱をさせるため。〔解答例〕

問2 (2) ㊦ (3) ㊦

問3 道端の重病の乞食を看病するため、御所に参内できないこと。〔28字・解答例〕

問4 そまつに扱うことはできない。〔14字・解答例〕

問5 我(名詞)／捨て(動詞)／て(助詞)／去り(動詞)／な(助動詞)／ば(助詞)

問6 第一の価値観 ㊦ 仏道では身分を問わず人間は平等である。〔19字〕
 第二の価値観 ㊦ 高貴な人間と卑賤な人間の扱いは異なる。〔19字〕(いずれも解答例。順不同)

現代語訳

比叡山延暦寺に仙命上人といって高德の僧がいた。(仙命上人が) 覚尊上人が住む鎌倉へ行ったところ、(覚尊上人は) 急ぎの用事があった、客人を(そこに) 置いたまま、ちょっと外出すると言って(出かけた後)、急いで出かけた人(「覚尊上人」)があらためて(家の中へ戻り入って、少しの間何か処理をほどこしている)、(仙命上人が) 不思議に思って、(覚尊上人が) 出て行った後、(覚尊上人が) 処理をほどこしていた跡を御覧になると、すべての物に一つ残らず封印をしてあった。この高僧(「仙命上人」)が思うことには、「たいそう感じの悪い行為だな。まさか、外出の度にこのように処置をほどこしはしないだろう。(このようなことをするのは) 私人(が物を取ることを)を疑う気持ちからであろう。早く帰って来いよ、このことを非難してやろう」と言った。

(仙命上人が) このように思っているうちに、(覚尊上人が) 帰ってきた。(仙命上人は) 考えて用意していたことであるので、(覚尊上人の) 顔を見るや否や、この事を言う。(覚尊上人が) 言うことには、「いつもこのように処置をほどこしているのではない。また、人が(自分の家の)物を取ることを惜しんでいるわけでもない。けれども、あなたさまがいらっしやるので、このように処置をほどこしたのです。その理由は、もしこれら(の物)が少しでもなくなっていることがあれば、(私は) 凡夫(「悟りを得られず、煩惱にとらわれている人間」)であるから、ひよっとしてあなたさまを(盗人だと) 疑い申し上げる気持ちが生じるかもしれない、そのような事は大変な罪障(「成仏・往生の妨げとなる悪い行い」となるに違いなく思われて、自分の心が信じられないために(このように物に封印をして取られないようにしたのです)。(私が) どれほどの物を惜しむでしょうか(「いや惜しみなどしません」と言った)。

こうしてその後、鎌倉の聖(「覚尊上人」)が(自分より) 先に亡くなったと聞いて、「(覚尊上人) は必ず極楽往生を遂げたことであろう。物に封印をしたほどの心の名人(「人間の心というものを熟知し、上手に扱える人、すなわち高德の僧」)であるから」と仙命上人は言った。

解答

問1 急ぎの用事があつて〔9字・解答例〕

問2 (2) 覚尊上人 (3) 仙命上人

問3 かく(副詞) / しも(助詞) / したため(動詞) / じ(助動詞)

問4 (イ)

問5 物に封印をし取られないようにしたのです。〔20字・解答例〕

問6 私がどれほどの物を惜しむでしょうか、いや惜しみなどしません。〔30字・解答例〕

問7 (ア)

解説

問1 口語訳の問題。品詞分解をしながら、単語の意味を正確に訳出する。「とみ(頓)」は「にわかであること、急なこと」という意味を表す。そこで、「とみの事」とは「急ぎの用事、急な用事」のことである。「ありて」はラ変動詞「あり」の連用形に接続助詞の「て」が付いたもので、意味は現代語と同じ。したがって正解は「急ぎの用事があつて」となる。なお、設問には「句読点とも十字以内」とあるが、ここでは特に句読点を付ける必要はない。

問2 主語を問う問題。傍線部のみから正解を得ることはできないので、登場人物や場面、状況を考慮に入れ、前後の文脈から判断する。傍線部(2)・(3)が含まれている「覚尊上人が住む」以下の一文について、文脈をたどりながら順に主語を確認してみる。まず、

覚尊上人が住む鎌倉へ行ったのは、直前に紹介されている仙命上人である。次に、急ぎの用事があつて客をその場に残したまま外出したとあるが、「客人」は仙命上人のことであるから、外出したのは覚尊上人ということになる。そこで、「急ぎ出づる人」とは、覚尊上人を指し、家へ帰つて来てあらためて部屋に入ったのも覚尊上人である。

(2)について。傍線部はマ行下二段活用動詞「したたむ」の連用形に、過去の助動詞「けり」の已然形と接続助詞の「ば」が付いたものである。「したたむ」はここでは「処理する、始末する」という意味。具体的な内容については、後に「よろづの物にとごとく封を付けた」とあるように、部屋の中ありとあらゆる物に封印をして他人が手を触れられないようにしたのである。文脈をたどると、「内へ帰り入りて……したためければ」と続き、部屋に入った人が部屋の中の物に対してこのような処理をしたと考えられる。したがって正解は覚尊上人になる。

(3)について。まず、傍線部(2)以降の動作主を順に追っていく。「あやしうて」はここでは「不思議に思つて」という意味に解釈できる。出かけた覚尊上人が家に戻つて来て部屋の中で何かしていることに對する不審な気持ちであるから、「あやしうて」の主語は仙命上人。そこで、「あやしうて」に直接続く内容を考える。直後の「出でて」では、不審に思つた仙命上人が外へ出る事になり、それでは不自然。「出でて」の主語は覚尊上人で、部屋での処理を終えて部屋から、あるいは家から出る動作を表していると考えられる。そこで、覚尊上人が部屋から、あるいは家から出た後、「跡を見給ふ」とは、部屋の中に入って処理の跡を見ることがあるから、主語は仙命上人となる。なお、傍線部には尊敬の意を表す補助動詞「給ふ」があるが、本文の地の文で敬語が用いられているのはここ一カ所だけである。仙命上人にも覚尊上人にも他の箇所では敬意表現がないので、今回の場合は尊敬語の有無で主語を判断することはできない。

問3

品詞分解の問題。語と語の接続に注意してどこで区切れるのかを見極めること。「かく」は副詞で「こう、このように」という意味。「しも」は本来は、強意を表す副助詞「し」に係助詞「も」が付いたものだが、それが一語化して、「しも」で副助詞となり、強意を表す。なお、設問にあるように単に品詞名を問われた場合は、助詞の種類まで書く必要はない。「したため」はマ行下二段活用の動詞「したたむ」の連用形。「じ」は打消の推量、または打消の意志を表す助動詞「じ」の終止形。ここでは、文脈から打消の推量を表している。ちなみに口語訳をすると、「このように処置をほどこしはしないだろう」となる。

問4 単語の意味の問題。漢字がもつ意味から判断しようとする、さまざまな解釈が成り立ちそうだが、「罪障」は仏教用語。知識

として意味を知っていれば、容易に正解は得られる。

「罪障」とは「成仏・往生の妨げとなる悪い行い」を意味する。「成仏」とはこの世のわずらいを越えて仏になること、「往生」とは死後、仏の世界である浄土へ生まれ変わることであり、当時の人にとつて、とりわけ仏道修行者にとつての究極の願いである。選択肢には厳密な意味で正しいものがないように思われるが、意味的に最も近いものとして、(イ)の「仏道修行のためのさまざま」が選べる。本文では、妨げとなる悪い行いとは、他人を盗人ではないかと疑うことを指している。

(ア)の「出家するための」は成仏や往生以前の段階の問題である。また本文の内容に照らしても、罪障を恐れる覚尊上人はすでに出家している身であるから不適切。(ウ)の「友情を深めるための」は内容的に明らかに不適切。(エ)の「人として正しく生きるための」は正解と最も紛らわしい選択肢で、「仏徒として」とあれば正解とも考えられるが、単に「人として正しく」では意味があいまい。「罪障」は仏教用語なので、やはり仏教に関係のある意味内容が求められる。(オ)の「僧侶としての高い位に昇るための」は「高い位に昇ること」が一見修行を積んだ結果のようにも思え、内容的には(イ)に近いようにも考えられるが、位の高い低いと成仏や往生とは直接関係はないので、これも×。

問5 読解問題。傍線部は会話文中にあるので、会話文全体の意味内容を考慮して、話者が何を言いたかったのかを探る。

傍線部は覚尊上人の言葉。会話文全体の内容は、覚尊上人が物を封印したことに対して仙命上人が非難した、その非難への申し開きである。まず、覚尊上人は会話のはじめで、物に封印をした理由について、いつもしているわけではない、また、物を取られることを惜しんだわけでもない、とはっきり断っている。その上で、理由は「御坊のおはすれば」と明言している。「御坊」とは僧に対する尊敬語で、ここでは話相手の仙命上人を指している。つまり、仙命上人の存在が原因なのであり、さらにその理由として次のように述べている。もし自分の留守中に物がなくなった場合、仙命上人が取ったのではないかと疑うかもしれない。それは自分が悟りを開き切れていない、煩惱にとらわれた人間であるからだが、人を疑うことは成仏や往生への妨げになるだろう、と。この後に続くのが傍線部だが、「わが心」とはもちろん覚尊上人の心であり、「疑はしさ」とは、もしかしたら自分は仙命上人を疑うかもしれない、仙命上人に疑いをかけない自信はないという自分の気持ちへの不自信である。「疑はしさ」の後の「になむ」は、格助詞「に」に強意の係助詞「なむ」が付いたものだが、ここでの「に」は下へのつながりから原因・理由を示していると考えら

れる。そこで傍線部は「自分の心が信じられないために」となる。これは言うまでもなく、自分が物に封印をしたことの理由である。したがって、その後に省略されている内容は、字数制限を考慮して、「物に封印をし取られないようにしたのです。」などとなる。なお、会話文中には丁寧を表す補助動詞の「侍り」が用いられているので、補う内容を記す際にも丁寧表現が望ましい。

問6 口語訳の問題。やはり品詞分解をしながら、単語の意味を正確に訳出する。ここでは、傍線部が会話文中にあるので、会話文全体の内容と照らし合わせることで、意味内容の確認をするとよい。

「何ばかり」の「ばかり」はここでは程度を表す副助詞。そこで、「何ばかりの物を」という意味になる。

「かは」は疑問や反語を表す係助詞「か」に、係助詞「は」が付いたもので、「かは」という形になると多くは反語を表す。ただし、例外もあるので最終的には意味内容から判断する。「惜しみ」はマ行四段活用の動詞「惜しむ」の連用形で、意味は現代語と同じ。「侍らむ」は丁寧を表す補助動詞「侍り」の未然形「侍ら」に、推量の助動詞「む」の連体形が接続したもの。そこで、まずは疑問文として訳すと、「どれほどの物を惜しむでしょうか」となる。ただし会話文のはじめの方で、「人の物を取るを惜しむにもあらず」と物を惜しんだのではないことが明示されているので、ここではやはり反語の意味を表していると考えられる。したがって正解は、「私がどれほどの物を惜しむでしょうか、いや惜しみなどしません。」などとなる。なお、反語文の訳し方としては、「〜か、いや〜ない」というパターンを頭に入れておくとよい。またここでは制限字数にゆとりがあったため、主語を補った。「三十文字以内」とあった場合、目安としては二十五文字以上書くのが望ましいので、直訳をした上で、まだ字数にゆとりがある場合は、できるだけわかりやすい口語訳になるように、適宜ことばを補うとよい。

問7 読解問題。空欄補充という形で問われている。ここでは、空欄が会話文中にあるので、場面や状況を踏まえた上で、会話文全体の意味内容からある程度察しをつけて、選択肢一つ一つを吟味していけばよい。

本文の「かくて後」以降の二行は、覚尊上人が物に封印をしたというエピソードの後日談である。会話文の話者は仙命上人で、「鎌倉の聖」、すなわち覚尊上人の死を聞いた時の感想と考えられる。まず、空欄の後の一文をみると、「物に封付けしほどの」は「物に封印をしたほどの」という意味で、例のエピソードを取り上げている。続く「心の匠」であるが、「匠」とは「彫金・木工などの細工師、職人」を意味する語だが、ここでは、「心の」とあるので、人間の心というものを熟知してそれを上手に扱える人と

いう意味で用いていると考えられる。具体的には、覚尊上人のことであり、覚尊上人が他人を疑うことを避けるために、あらかじめ物に封印をして取られないように処置をほどこしたことを指している。覚尊上人が心を制御する名人であり、高德の僧であることをこの語によって表しているのである。次に「なれば」は、断定の助動詞「なり」の已然形に接続助詞「ば」が付いたもので、ここでは確定条件の原因・理由を表している。「心の匠であるから」となるわけだが、「であるから」何なのかと考えた場合、この文は空欄と倒置になっていると考えられる。そこで、この後に続くふさわしい内容を探すために選択肢を順に吟味していく。

(ア)「必ず往生しぬらむ」は「必ず極楽往生を遂げたことであろう」という意味である。「ぬらむ」は、完了の助動詞「ぬ」（ただし、ここでは強意を表す）に現在推量の助動詞「らむ」が接続したもので、「今頃はきつと〜してしまっているだろう」という意味を表す。覚尊上人は罪障を恐れて物に封印をしたわけだが、そのように心を制御できる高德な僧であったのだから、今頃は間違いない仏の世界である浄土へ生まれ変わっているだろうという推量は内容的に正しい。念のため、残りの選択肢もみておく。

(イ)「後生あしかりなむ」は「後生はきつと悪いだろう」という意味である。「後生」とは「死後に生まれ変わる事、またその世」、または「極楽往生」を意味する。「あしかりなむ」は形容詞「あし（悪し）」の連用形「あしかり」に、完了の助動詞「ぬ」（ただし、ここでは強意を表す）の未然形「な」と推量の助動詞「む」が接続したもので、「きつと〜だろう」という意味を表す。簡単に言えば、極楽往生はできないだろうという意味であり、(ア)とは内容的に正反対になるので、不適切。

(ウ)「財宝あまた残しけむ」は「財産をたくさん残したことであろう」という意味。「あまた」は「数多く、たくさん」という意味の副詞。「けむ」は過去推量の助動詞である。高德な僧であることと、財産の有無はまったく関係がないので、これも不適切。

(エ)「世の聞こえ恥ぢつらむ」は「世間の評判をきつと気にすることであろう」という意味になる。「聞こえ」は「評判、うわさ」という意味を表す名詞。「恥ぢ」は、ここでは「遠慮する、気にする、はばかり」という意味だと考えられる。「つらむ」は完了の助動詞「つ」（ただし、ここでは強意を表す）に現在推量の助動詞「らむ」が接続したもので、「必ず〜しているだろう、きつと〜ただろう」という意味を表す。高德な僧が世間にはばかりるものは何もないはずだから、これも不適切。

(オ)「必定地獄にや落ちけむ」は「必ず地獄に落ちたのだろうか」という意味である。「や」は係助詞で、ここでは疑問を表していると考えられる。「けむ」は過去推量の助動詞。「や」は係助詞「か」に比べ、意味的に弱いので、「地獄に落ちたのか」というはっきりした疑問というよりも、「地獄に落ちたのだろうか、きつと地獄に落ちたのだろうか」といったニュアンスを表す。(イ)の内容をさらに強め、具体的に述べたものと見られる。やはり、これも内容的にあてはまらないので不適切。

したがって正解は(ア)となる。